

第2回生徒減少期における府立高校の在り方検討会議 ～より魅力ある高校教育の推進に向けて～

1 日 時

平成27年 9月11日（金）午後3時～午後5時

2 場 所

ルビノ京都堀川 アムールの間

3 出席者

- 委 員 7名（欠席2名）
- 教育委員会 橋本教育次長、川村指導部長、山笠高校教育課長、
中島高校改革担当課長ほか

4 概 要

- 事務局からの資料説明
- 参考人意見
- 協議
- 次回開催予定

■参考人意見 ◆：座長 ○：委員 ●：参考人 □：教育委員会

「北部地域の私立高校の現状等について」

- ・学校法人共栄学園 中井理事長
- ・京都聖カタリナ高等学校 小林理事・校長

- 本日は、意見等を述べる機会をいただき、感謝申し上げます。私からは、北部地域の厳しい私学の現状とできればこうあってほしいという意見を述べさせていただきます。北部地域の中3生数は急減しており、特に、平成18年から23年までの一番厳しかった6年間には、平成17年から21年の5年間に比べて31%も生徒が減少した。こうした中、全国的には、平成13年以降、約500校強、率にすると約12%の全日制の公立高校の統廃合が進められているが、府北部地域においては統廃合が行われていない。さらに、平成17年から21年の間は、中3生数の減少率に見合った府立高校の募集定員の削減も行われなかったため、北部地域の私学がまともに影響を受け、4年間で入学者が激減し、平成21年には私学7校の1校当たりの高校1年生数は平均119名と3学級を切ってしまった。そして、当時一番厳しい状況にあった福知山女子高校が、この生徒急減の影響を受け、急激な減収により経営破綻し、やむなく福知山成美高校と統合するという残念な事態が生じた。また、平成27年4月には、生徒急減が今後進むという状況にありながら、福知山高校に中高一貫教育校が設置されたため、北部地域で唯一の私立中高一貫教育校である本校の生徒数が過去3年間の入学者に比べて40%も急減し、これまで行ってきた教育が行えない状況、さらには、存続も危うい状況となっている。この2つの出来事から、これまでは私学に配慮したり、相談して進めるといったことをしていただいていたのではないかと思うが、さらに生徒が減少するこれからは重要だと思っている。私学も公立高校と共に、府民にとって重要な高校教育を担っており、私学の学校規模や生徒数規模も考慮して調整していただかないと、これまでのようなやり方では私学は運営すらできない状況になってしまう。

今後の京都府の発展を考えれば、公私を問わず、府民に高校教育の成果を示すことが不可欠である。府立高校の望ましい学校規模等を考えるにあたっては、私学のことも重視していただきたい。もちろん、私学においても、教育内容を向上し、成果を出していかなければならないという認識のもと、本府の高校教育の振興に努めていきたいと考えている。

現在、北部地域には私学が6校あるが、1学年120名を切っている学校が3校ある。また、府立高校でも1学年の生徒数が120名を切っている学校がある。本来、高校教育に期待される人間形成においては、一定の生徒がいて、切磋琢磨する中で様々な貴重な力を培うものだとして認識している。今後、府立高校の再編等について検討されると思うが、私学の教育も府民の教育であるということをご理解いただき、公立高校の再編等の計画においては、私学のことも配慮して推進していただきたい。

- 府全体の私学に通っている生徒の割合は43.5%で、全国第2位である。ちなみに第1位は東京都で55%である。つまり、京都府においては、おおよそ2人に1人が私学に通っており、公教育において私学が大きな役割を担っていると言える。京都府には、北部地域に6校、南部地域に34校、計40校の私学がある。ただし、北部地域6校といっても、地域が大変広いので3つのブロックに分けて考えている。丹後・宮津地域に1校。福知山・舞鶴の中丹地域に4校で、福知山市に3校、舞鶴市に1校。そして南丹・亀岡の口丹地域に1校である。前回の本検討会議の資料にもあるように、府内で中3生数の減少率が一番大きいのは丹後・宮津地域で、2年後には180名減るという大変な状況にあり、さらに、その後も減っていく。2番目に厳しいのが口丹地域で、5年後に180名減り、以降も徐々に減っていく。そして3番目が中丹地域である。つまり、北部3地域のいずれにおいても生徒減少率が高い。私も校長になって思うところだが、私学にとっては経営が非常に重要であり、生徒募集を一番の要に考えないと経営が大きく傾いていく。人件費削減などを繰り返しながら、何とか経営しているという現状である。私学にとっても教育の充実や特色化は非常に大切なことであり、日々努力を重ねている。生徒自身がどんどん変わっていく中、生徒のニーズに合うように特色を出そうと努力しているが、生徒減少だけではどうにもならない。府立高校の適正な規模や活性化策を検討されることは大切だが、それぞれの地域において私学も必死になって公教育を担っているということをご理解いただき、私学6校に対して十分な配慮をしていただくよう強く要望する。今回はこのような機会を与えていただき、深く感謝申し上げます。

◆質問があればお願いしたい。

○福知山市には私学が3校あるが、公私比率はどのくらいか。

●北部地域においては私学が20%を少し切っており、府立高校が72~73%程度である。

○北部地域の中でも私学の割合が高いのは福知山市か。

●そのとおりである。

◆今の説明に対して、教育委員会から補足することはあるか。

□中学生がどこに進学等をしたのかという進路実績でみると、中丹地域の中学校卒業生の府内全日制公立高校進学率は67.4%、府内・府外を合わせた全日制私立高校への進学率は25.7%である。また、丹後地域については、府内全日制公立高校の比率が非常に高く約80%である。

○兵庫県の豊岡市にも近畿大学附属豊岡高校があり、京丹後市からは距離的に近いと思うが、どの程度進学しているのか。

□豊岡市の私学への進学率は把握していないが、京丹後市の中学校卒業生の他府県全日制私立高校への進学率は1.7%である。

●福知山市から兵庫県に進学している生徒は3名程度と少ない。逆に、兵庫県から福知山市の私学に通う生徒は相当数いたが、近年は、兵庫県の公立高校も定員割れしている状況もあり、兵庫県教育委員会の方針で、兵庫県の公立高校へ進学するよう指導されているので、兵庫県からの入学者数の確保は年々難しくなっている。

■協議（主な意見） ◆：座長 ○：委員

◆前回協議の確認

・今後の府立高校の在り方を考えるにあたっての主なポイント

①府立高校と地域との結びつき

（地域における府立高校の役割、地域の活性化につながる高校づくり）

②教育の質を確保していくための学校規模

（教育効果を維持するための最小規模、教育内容にそった適正規模）

③府立高校と私立高校との関係

（それぞれの地域における公私間の役割分担、私立高校も含めた適正配置）

④専門的な学びや多様な学びの場の保障

（専門学科の在り方や分校の役割）

・第2回は、特に生徒減少の著しい北部地域の府立高校の在り方等について議論

◆まず、口丹・中丹・丹後地域の府立高校の現状や教育環境上の課題について、効果をあげるためにはどうすれば良いか。また、教育内容を元にした適正規模についても議論する必要がある。さらに、不登校や特別な支援を必要とする生徒に対する分校の果たしている役割が大きいという資料説明もあった。

こうしたことを踏まえ、北部地域の府立高校の現状や教育環境上の問題について、どのような観点からでもよいので意見ををお願いしたい。

○地域の活性化に府立高校が非常に大きな役割を果たしているということもあるが、小・中学生にとっても、地域に様々な働きかけをする高校の存在は憧れであり、目標であると言える。小・中学校にとっても地域にとっても高校の役割は大きいと感じるところである。

丹後地域の中学校においても、「地域に誇りを持とう」「地域に貢献しよう」といったことを教育課程の中に盛り込む学校が増えてきたが、これまで丹後地域や中丹地域の府立高校が取り組まれてきたノウハウや活動が、本当に良いお手本であり、生きた教材になっている。したがって、地域等の活性化を考える上でも、これまで培われた各高校の取組を継続するといった観点も必要ではないかと思う。

○これまでから高校発信で、企業や行政に対して様々な提言が行われている。高校生学習内容や研究内容を活かした提言が行われており、学習面での地域への働きかけや文化・スポーツ面での働きかけは大きな意義がある。文化面では、例えば、書道や美術のみならず、丹後地域には合唱で世界的に活躍したクラブがあるなど、文化の拠点としての位置づけも大きい。また、スポーツ面では、資料には全国大会等での活躍が示されているが、さらに読み解くと、高校のクラブが地域のスポーツクラブ的な役割も果たしており、小・中学生が高校生と一緒にスポーツを経験

し、やがては全国、さらには世界に飛び立つ選手も育っている。こうした現在の取組を活かす上で、学習面や文化面、スポーツ面で様々な活動に取り組めるような一定の規模を持った高校が望ましいと考える。

- ◆教育をする場所としての高校というだけでなく、様々な地域とのつながりの中で地域に果たしてきた高校の役割は大きい。したがって、これまでの成果を継承し、発展させていくためにはどうすればよいかということから適正配置を考える必要がある。確かに、高校生が頑張っている地域は、文化面でもスポーツ面でも元気がある。高校教育の在り方や役割、適正規模だけで考えがちだが、波及効果というか、広がりということも十分考えないといけない。
- 経済的な視点でみると、地域とのつながりを考えるにあたっては、地域を支えてきた学科の存在がとても重要である。単に、数の論理で考えるのではなく、私立高校も同じだが、専門学科の卒業生が地域を支えてきたという点もしっかり踏まえて検討しないと、地域の疲弊に、より火に油を注ぐようなことになり、加速度的に地域が衰退していくことにもなりかねない。
- 経済的な所得格差について、正確な数字ではないかもしれないが、東京都の平均年収は480万円ならば、京都府は380万円。丹後地域では200万円を割っていると言っているのではないかと思う。こうした中で、子どもに高校教育を受けさせるために、保護者は大変な苦勞をしている。どのような考え方で高校の通学区域が決まっているのかよくわからないが、生徒は多くの公共交通機関を利用して高校に通学しており、例えば、宮津高校で言えば、過去には一番遠い地域から通っていた生徒は年間約50万円ぐらいの交通費をかけて通学していた。現在は、丹後海陸交通が200円バスを走らせるなど、公共交通機関の運賃改定により、大変家計が助かっているという声も聞く。ただし、この運賃設定は、京丹後市を含めた丹後地域の2市2町のみで、福知山市や舞鶴市、綾部市の公共交通機関では取り組まれていない。通学費のことも考えて検討してもらわないと、高校教育を受けたくても受けられないといったことになりかねない。丹後地域の中学生で、通学区域が府内全域である高校を選択できるのは経済的に許される状況にある子どもたちであり、みんなが選択できるというものではない。公共交通機関における通学費の軽減などについてもしっかりと議論してもらいたい。
- ◆高校が地域において役割を果たすためには、卒業生が地域で活躍してくれること。そのためには府立高校の現状を踏まえて教育環境をどのように整えていけば良いか。しっかりと勉強できる環境において、力をつけ、卒業後も地域に貢献してもらうためにはどのような教育内容が良いのか。また、分校が果たしている役割も含めて、もう少しご議論いただきたい。
- 様々な分校を訪問し、実態を見せてもらったが、例えば、A高校とA高校B分校であれば、本来であれば同じ高校の一つのカルチャーが共有されていなければならないと思うが、実際には、分校には本校とは異なるカルチャーが形成されている。理由の一つとして、教員文化がまったく違うことがあげられる。本校に勤めている先生方と分校の先生方は、同じ学校を冠にしても基本的に全然違う学校であるという認識を持っておられるが、北部地域の高校を再編するなど、高校の在り方についてグランドデザインを描く場合、これまでの本校・分校の考え方ではなく、例えば、両校をキャンパス化するといった発想も必要だと考える。大学においては、2キャンパス、3キャンパスを有している大学がたくさんあり、例えば佛教大学であれば、メインキャンパスと二条駅前にあるキャンパスの間を教員が行き来するので、同じ佛教大学としての教員文化が共有されている。二条だけ

らとか、千本北大路だからといった言い方はしない。これが一般的な大学の有り様だと思うが、この発想を府立高校の再編にも応用する必要があるのではないか。つまり、本校を分校化すると考える場合でも、単純に分校化するという発想ではなく、A高校の第2キャンパス、第3キャンパス化するような形で、既存の学校名を残しながら、しっかりと文化を共有させる。あるいは、教員文化を共有していく。そうすることによって、それぞれのキャンパスに通う生徒たちにもしっかりとしたプライドと見識を共有させるという発想も必要ではないかと考える。

○確かにマンモス大学などはいろいろな地域にキャンパスを設けているので、今のお話はよく理解できた。府立高校に例えた場合、教員のモチベーションや文化という点について、保護者として感じるが多々ある。府立高校と府立特別支援学校は合わせて58校あり、人事異動によって先生方が学校を異動するせいか、その高校の重荷を背負っていないと感じる先生とその高校に対して非常にモチベーションを持って取り組んでおられる先生がいる。人事異動がある府立高校でも、学校ごとに同じ教員文化を共有する必要性があると感じている。

○一定の所得がある方の中には、大学進学やその後の就職を考えて、子どもを大学の附属高校や私立高校に進学させる方が多く、残念ながら地元の府立高校には進学させない。自宅に近い府立高校のそばを通過して、別の高校に通学しているという残念な状況が見受けられる。

また、一時、京都市内の高校においても定員割れが生じるといった事態が生じた。府立高校においても、学力、あるいは、スポーツや文化など、特色となる分野を活かすことが大切である。子どもが通っている府立高校には、あまり強い運動系のクラブはないが、吹奏楽部が最近脚光を浴びており、PTA主催の秋の音楽会では、近隣の小・中学校の吹奏楽部や合唱部等に来ていただいて一緒に演奏する。また、地域の方にも来ていただく。一時は少し閉鎖的で、地域に根ざすという割に実態としては根ざしていなかった時期もあった。これまでは地域ごとに行ける高校が決まっていたので、小・中・高が一体となった地域連携が行われていたが、入試制度の改革により地域性が薄れたように思うが、やはり地域性がないとその高校に地域から進学しようとしなくなるので、吹奏楽部のように、小学校や中学校だけでなく、自治連合会の夏祭りで演奏させていただいたり、地域と行ったり来たりの関わりをもつことこそが、地域に根ざす高校の在り方だと思っている。

また、他の府立高校においても、〇〇デパートを開催するなど、様々な取組を行っている。こうした取組を積み上げ、あらゆる面で府立高校が頑張ってもらえると、保護者としても応援できるかと思う。

○丹後地域には、定時制課程の分校が2校ある。分校が設置された当時は、地元の企業や産業と密接に結びついた役割を果たしていたと思うが、近年は、特別支援学級で学んだ子が将来の就職などに向けて学ぶ場であったり、中学校時代に不登校や不登校傾向であった子どもたちが学ぶ場であるなど、多様な学びの場と機会を与えてもらっている。中学校時代には欠席が多かった子が、高校進学後はのびのびと活動したり、学習に取り組んだりして、ほとんど欠席せずに通学しているといった話も聞いている。今ある分校を存続させるということではなく、こうした子どもたちの学びの場としての機能や成果を違う形で残すなり、新たに組み替えるなどして、継承することが重要であると考えている。

北部地域においては、通学手段の課題もあるため、単純に組み合わせていくということは難しいかもしれないが、通学にも配慮しながら、分校の持つ現在の成果や役割を形を変えて継承する新しい仕組みができればと思っている。

○我が社においても分校の4年生を1年間インターンシップで受け入れている。生徒

を見ていると、昔の勤労学生とは若干変わってきているが、いかに基礎学力をしっかりと付けさせるかが大切なのだと実感しており、我が社に週3日程度来ている生徒にもそのような話をしている。

同じ高校の本校と分校とはいえ、生徒が求めるものにも差があるし、高校教育として高度な教育を受ける部分と基礎学力の定着を図るための教育を受ける部分があるなど、差があるのも事実である。しかし、それぞれの子に適した教育の場がなくなると、地域の多様な子どもたちを救う手立てがなくなってしまう。分校に通う生徒も地域を支えてくれる重要な人材なので、分校の生徒たちをしっかりと支えていこうとインターンシップを受け入れる企業もある。こうしたつながりはとても大切である。

- 口丹地域以北には分校が7校ある。全日制課程もあれば、定時制課程もあるが、当初設置された背景としては、地域の学びを保障するという要素が大きかったと思う。伊根分校にしても間人分校にしても、少し中心地域から距離があり、本校には通学しにくい地域における教育を担っていたわけだが、現在は、その地域の子どもたちのためということではなく、役割が大きく変わってきている。つまり、その地域に立地している根拠が少し希薄になってきていると思われる。

毎年、定時制・通信制の生徒たちが生活体験発表大会において、3年間なり、4年間の学びと就労経験の中で、こんな力を身につけたということを発表してくれるのだが、いずれの高校の生徒も、胸を張って、本当にすばらしい発表をしてくれる。そうした生徒の成長を見ていると、分校の果たしている役割は大きいと思うのだが、その地域に立地している必然性は少ない。高校において、コースや学科を設置するなど、何らかの形で学べるようにすることが、大幅な生徒減少の中での一つの手段ではないかと思う。

- 小・中学校と同じく、高校にも学校評議員がおられ、学校経営上、様々なご意見やご助言をいただいている。かつて、各地域の学校評議員の方が集まる機会があった際、丹後地域の学校評議員の方が、「学校を出て、みんな県外に行ってしまう。何のための教育なのか。」とおっしゃっていたことが、今でも記憶に残っている。本日の資料を見ていて、ものづくりなどの製造業系については、大きな製造所がないために、高校で学べば学ぶほど、地域の外へ出て行ってしまうのかもしれない。雇用という観点で見ると、対個人サービスが一番雇用創出に大きな役割を果たしている。高速道路が開通して間もなくは、多くの人たちが北部地域に押し寄せた。道路に魅力があるだけでなく、その地域に魅力があるからこそ、あれだけの多くの人が丹後地域を訪れたのだと思う。そうしたことを考えると、地域の高校に観光に関する学びがあっても良いのではないかと考える。また、高齢者の多い地域でもあるので、福祉や医療に関わる専門学科があっても良いのではないかと考える。パティシエというのも魅力の一つであり、話題性を持てば、吸引力や集客力が生まれる。そうしたことをもっと広く考えながら、地域との関わりや地域創生との関係性も十分踏まえて、昔ながらの学科ではなく、雇用創出に直接つながるような、企画力や商品開発なども学べる学科が求められるのではないかと思う。

◆職業教育の在り方と活性化に関して、連続して何かご意見があればお願いしたい。

- 府立高校の役割の一つは、その地域に根ざすことである。例えば、府内の特色ある学科の一つに北桑田高校の森林リサーチ科がある。以前に北桑田高校に行かせていただいた際に、「君たちは命のやりとりをしている。それはとても大切なことなのだから、誇りを持ってほしい。」と生徒たちに話をしたことがある。京都府においては、「森の京都」を府域発展のプロジェクトの一つに掲げ、森や森林の文化を大切にしていくことを重要視している。そうした取組を支える人材を育

てていくことも府立高校の役割であるので、内容を少し変えながらも残さなければならぬ専門学科はあると思う。残すべきは残しつつ、どのように変えていくかということについても議論すべきだと考える。

○これまでは、普通科を残してそれ以外の学科をなくすという状態が続いてきた。要するに、多目的ホールばかり造って、専門的ホールを造ってこなかった弊害が原因ではないかと思う。中丹地域には中丹地域の、丹後地域には丹後地域の多くの課題があるが、その中でも次代を担う専門性を備えた子どもたちを育ててもらわなければならない。そのためには学科の在り方が大変重要であると思っている。現在、海洋高校にとっても光が当たっていて、多くの方から大きな関心を持たれている。宮津地域においても9月19日に海洋高校生が「1日レストラン」を実施してくれるのだが、高校生と地域が一緒になって取り組むことはとても大切なことである。例えば、観光産業に就職できるような力を高校で身につけるような学科や高齢化に対応して必要となる職業について学ぶ学科などを考えれば、まだまだできることはある。総合的な学科ではなく、専門的な学科や高校について、この機会に是非検討してもらいたい。

◆高校の在り方については、将来に対して大きな夢を描いている高校生に何が大切なのかをアピールするという視点でも考えていくべきだというご意見であった。何が魅力であり、今の社会にとって何が大切なのかという観点が抜け落ちてしまわないようにしなければいけない。職業教育の在り方や活性化について、他にはいかがか。

○子どもたちの社会参加への意欲を育む上でも、就職や進学といった将来の進路につながる高校の存在は大きい。北部地域には専門学校や大学などの高等教育機関が少ないために、高校が果たす役割は大きい。例えば、高校生が素晴らしい研究成果を発表してくれることが、中学生にとっては高校卒業後の進路として大学進学等を考える上でプラスになるということもある。

また、産業も大切だと思うが、丹後地域にはジオパークという素晴らしい地質環境もあるので、そうしたことを研究するような学科や、高齢化率も非常に高い地域であるので、看護や介護について学べる学科があると就職にもつながっていくものと考えられるので、将来を見据えたことを学べるような場も必要ではないか。もちろん観光もあると思う。多様な内容を高校において学べる学科等を創ってもらうことが大切だと考える。なお、北部地域の私立高校にもそうした専門学科があるので、そのあたりの兼ね合いや共存方法については考慮していく必要があるかと思う。

◆公私間の役割分担という点について、学びの場が公私に関わらずきちんと整えられることも大切であるということも検討する必要があるとのご意見であるが、この点について他にはいかがか。

○バスケットボール部の指導に40年間携わっているが、教え子の中には北部地域の学校でバスケットボール部を指導している者もいる。その教え子が、「部員が少ない。一生懸命に指導し、また、保護者等にも無理をお願いして費用のかかる遠征にも行っているが、一番肝心の大会で結果的に力が出せずに生徒は自信を失い、劣等感を持ってしまう。」と常々嘆いている。これが正しいことかどうかは分からないが、生徒の中には、南部地域にある高校や都会に対して劣等感を持つ子もいるのではないかと思っている。一部の声ではあるが、そういうことがあるとすれば、地域性ということも大切だが、学校経営者として考えると、その地域に人が居ないのであれば、南部地域から引っ張ってくるという方策も考えなければならないのではないか。例えば、南部の私学が北部の高校を経営をさせてもらうと仮定すると、バスを連ねて生徒を北部へ連れて行き、一週間連続で一緒に勉強させたり、クラブも一緒に練

習させるというような方法も考えたりもする。

公立高校においてはそうした手法は難しいと思うが、私学の見地からすると、まさに同じ土俵で、同じように自信をもたせていくことが教育だと思うので、そういう方法もあるのではないかと考える。

- 先日、文部科学省の小松初等中等教育局長から話を聞く機会があった。国はこれからどんどん改革を進めていこうとしている。皆様ご承知のことだと思うが、例えば、高大接続改革として、高校の教育の在り方や大学教育の在り方、大学入学者選抜の一体的改革が叫ばれているが、今までのような知識丸覚えという入試ではなく、思考力や判断力、表現力といった主体性を持つ多様な人々が共に働く社会を生き抜く真の力を身につけさせていこうというようなことをおっしゃっていた。そのために、アクティブラーニングや学びの共同体、あるいはグループワークなど、子どもたちが集団で影響し合っ様々に取り組んでいくとのことである。本校は、110年続いた女子校であるが、来年度から共学にする。理由としては、少子化の進行ということも当然あるが、新しい教育を取り入れていこうとすると、女子だけで教育していくことには限界がある。つまり、5～6人での学びの共同体で様々な意見を教え合ったり、学び合ったりするとき、女子だけでは限界がある。やはり、男子3人と女子3人など男女と一緒に学ぶことで様々な発想が融合されたり、刺激し合うことで新しい教育ができたりすると考え、これからの教育のためには110年の歴史を思い切って共学にしなければならないと踏み切ったところである。

府立高校においても、将来の教育を考える場合に、果たして地域を守ることだけで役割が果たせるのかということについても考えなければならないと思う。

今後は、英語教育もどんどん変わっていくし、ICT化もますます進んでいく。そうしたことに、狭い領域の中で果たしてどこまで対応していけるのかと危惧する。多くの人間が刺激し合っこそ、社会の中で生きていく力が身についていくのではないか。北部地域においては、そうした大切な課題を抱えていると考える。

- この間、京都府私立学校審議会でも議論されている内容をつぶさに振り返ると、冒頭に北部地域のお二人の先生方からもお話をお聞きしたが、すごく真面目に京都府の教育に取り組んでおられると感じている。また、公私がうまく共栄共存している点が京都府の良いところであると評価している。

福知山市域は私学の比率が高いので、同じ地域にある府立高校との共存、あるいは共栄を考える場合、私学に引いてくださいとは言えない訳だから、生徒数減少のシミュレーションを踏まえて、むしろ再編しやすい公立高校において、少し柔軟に考える必要があるのではないか。地域特性や生徒数減少のシミュレーションを考えて、私学としっかりと共存していく道を歩むには、府立高校さえ生き残れば良いということではないということ的前提にしなければならないと考える。

一つの例であるが、口丹地域の府立高校においては、同じ学科を持つ高校の競合関係が強い。そこのところをどう再編するかについて、教育委員会として何らか案は持っているのかどうか。大学でもそうだが、それぞれの主張だけを聞いていても話はまとまらない。同じ地域に同じ学部・学科をもった大学が集まると、結局競合してしまい、共倒れになる可能性がある。府立高校も同様で、例えば、設置学科や学科の内容を変えるなど学科再編について考えていかなければならない地域があるのではないかと思っている。

- 地域に非常に密着している高校については、人気がないから募集停止だ、廃止だという単純な議論ではなく、むしろ、地域にどういう人材が必要で、その地域人材をどういう学科を構成すれば輩出できるのか。あるいは、地域に返していけるのかといったことについて、ある程度柔軟に考えていっても良い時期ではないかと思う。地域人材を育てることが必要な高校はどこで、必要な学科は何かを議論する必要がある。

ある。その際には、普通科と商業科が併置している高校など現在ある学科の配置や学科内容をもう一度考え直して、地域人材を養成するための学科構成にするということも考える必要があると思う。これは大学のスクラップアンドビルドと全く同じで、既存の学部・学科に張り付いていないで、時代の流れや社会の要請、地域の要請に合わせて、学部・学科の構成を変えていくことが大学の基本戦略であり、同じことを府立高校でも行うべきではないかと考える。

- ◆教育の質の問題、それを踏まえての再編ということや今後の社会に求められるものという観点からの高校の在り方について議論しておく必要があるのではないかとご指摘をいただいた。いずれも大切なことであるが、少し現実的な話でいえば、中学生数の推移等を踏まえて推計すると2クラス規模の高校になる可能性もあるという資料説明があった。もちろん様々なタイプの高校教育があるので一概には言えないが、適正規模という点に着目するとどのように考えれば良いのかということについても意見をいただければと思う。理念ばかり議論していてもそれを受けた教育委員会も大変だと思うので、考えられる規模についても意見を出していただきたい。

- 前回は教育効果を維持するための最小規模があるという意見を述べたが、全国的にも高校生の発達段階等からすると、3学級を割ると単独校としては厳しいとの意見が多い。他府県の例で言えば、専門学科単独校について、商業高校と農業高校を合併し、商業と農業で複数の学科を設置して3学級にするなど様々なパターンがあるが、基本的には5学級以上が望ましいと考えている。京都府においては適正規模を8学級としているが、現実的には、かなり適正規模と開きのある高校もある。とくに3学級を割り込むと、単独校としては、学校運営や教育活動の面において、かなり厳しくなると考える。冒頭の私学の話をお聞きしていても、3学級を割ることが生命線であると思ってしまう。

毎年、中3生数に加え、中学生の進路実績や進路希望状況を踏まえて、私学と調整しながら府立高校の募集定員が決められている。私も長い間教員をしているので、クラブの試合などでは北部地域・南部地域に関わらず行くことがあるが、私学には本当に敬意を表するとか、これまでの実績等々に鑑みても、本当に良くおやりになっているなあと感じる。私は京都市内に住んでいるが、子どもの友だちなどが福知山市にある私学に行ったり、滋賀県の私学に行ったり、大阪府の私学に行ったりすることは普通にあることなので、様々な特色を発揮して生徒募集に当たっていることについても敬意を表している。今後についても期待を寄せるところは大きい。とはいえ、私学へのニーズがあってこそ私学の存続を前提にすることができるのであって、北部地域では学校数が減っていないというお話もあったが、おそらく行政も生徒のニーズを踏まえて、募集定員については大きく減らしている。市場原理のもとでのニーズを踏まえた学校づくりということが、府立高校にも求められるところであり、競争と共生ということ、競争も必要だし、私学であろうが、公立であろうが、隣の学校との共生も我々にとっては重要視しているところである。学校間の切磋琢磨が求められる中、行政サイドで全体の配置をどう考えるべきかということになるが、なかなか難しい問題だという印象を受けた。

- 私は京都市内に住んでいるが、近所の中学生がどのような理由で高校を選択しているかということ、例えば、高校では野球がしたいからと福知山成美高校に進学した子もいれば、両洋高校や立命館宇治高校に進学している子もいる。また、陸上競技やバレーボール、体操などがしたくて洛南高校に行く子もいる。あるいは、サッカーがしたいから山城高校。この夏甲子園に出場された鳥羽高校に行って野球がしたいなど、それぞれが自分の夢を持って高校を選択していると思う。本人たちには生徒数が減るということなどは全く関係のないことなので、この高校に行きたいと誘発するためには、公立・私立に関わらず、各高校が魅力を出してもらわないといけな

い。例えば、同じレベルの公立高校と私立高校であれば、保護者とすれば公立高校に行かせたいが、子どものやりたい文化系クラブやスポーツ系クラブで超有名な私立高校があれば、同じ成績でもそちらに行かせたいとも思う。

先ほど普通科ばかり増えているというご意見もあったが、高校生になる人数に合わせて規模の膨らまし方は工夫してもらって、A高校に行く生徒が少なくなったからといって単純にバサッと切らないようにしてもらいたい。

○先ほども専門分野について学ぶ高校や学科が必要だというご意見もあった。例えば、将来の進路を決めるために大学進学を目指すということもあると思うが、職種等によっては就きたい職業を目指しての学び始めが早ければ早いに越したことがないと思う。遠回りすると疲れてしまうので、そうしたことがないように、高校で自分の夢を見つけて、進路に向かえることほど幸いなことはないと思う。当然職種によっては大学や大学院を卒業しないと就職できないということもあるが、それはそれぞれの生徒が夢を持って目指すことである。府立高校・私立高校ともに、地域によって様々な問題を抱えているとは思いますが、子どもが夢を持って、その夢を目標に変えさせるような高校を築き上げていただきたい。

○公立高校と同じ特色を同じように出していたのでは、私学は勝てない。決定的な理由は、授業料を保護者から直接いただいているという点である。京都府のあんしん修学支援制度のおかげで、それまでなら経済的に私学に進学できなかった子が私学に来てくれるようになったことは、京都府及び府教育委員会がいろいろと努力していただいた結果だと思っており感謝しているが、京都府の私学の授業料は平均65万円であり、修学支援制度があっても保護者にかなりのご負担をしていただかなくてはならないため、私学は選択できないというケースもある。そういう意味で、公立と私学は同じ土俵には立っていないということだけご承知置きいただきたい。

◆学ぶ側にとって魅力のある教育内容が必要であるというご意見であったが、府立高校の在り方を考えるときに、地域のニーズなど様々な要素はあるが、学ぶ側に魅力を持ってもらえるように、画一的に決めるのではなく、各学校の性格を形作るための可能性をそれぞれの学校単位に委ねるということも含めて議論しておかないといけないのではないかと思ったところである。その他についてはどうか。

○府立高校の在り方についての話ではあるが、府立学校という観点から特別支援学校のことについて少し触れたい。口丹・中丹・丹後地域には、それぞれ特別支援学校があり、各地域における特別な支援が必要な子の学ぶ場として大きな役割を果たしている。また、それにも増して、各地域の特別支援教育の拠点として、子どもたちだけではなく、小・中学校の教員の相談機能や子どもたち同士の交流という面でも小・中学校や府立高校も含めて、特別支援学校との交流から学ぶべきものは大きい。そうしたことを踏まえると、南部地域には高校と同じ敷地内に特別支援学校を併設して、交流の機会をふんだんに盛り込むことによって教育効果が上がっているという事例もあるので、ぜひ北部地域においても、例えば同じ敷地内に交流ができるような環境をつくるなど、特別支援学校との連携を深めるような府立高校の在り方を考えていくことも大切なことではないか。特別支援学校との連携、交流による成果が私たちに様々な効果を与えてくれているので、そうした観点も必要だと思う。

○最小規模のことを述べると、高校をなくすことに積極的な発言をしているような誤解を与えかねないが、私が教員になった頃は、丹後地域に行くのも大変だったし、近隣の高校に行くのも大変だった。今は、交通網が整備され、自家用車があればだが、他校へ行く道路事情を考えても、かなりよくなっている。単に高速道路がつながったということだけではなく、町と町、集落と集落をつなぐ道路環境もよくなっ

てきている。他府県ともよくこういう点について意見を交流するが、通学バスを走らせるということに積極的に取り組まれているところが多い。様々な住民サービスや生徒の学びの保障という観点から、通学バスの整備についても検討する必要がある。また、海洋高校や農芸高校については、寮があるおかげで京都市内からも1割以上の生徒が進学しているという背景もあるので、通学バスや寮の整備など、学びの利便性を向上させる仕組みをつくってもらいたい。

◆通学への配慮、もっとストレートに言えば通学費についても十分に配慮しておかないと、同じ府内に住んでいるのに極端に通学費の負担に差がつくということではおかしい。どういう形にするのが良いかについてはいろいろなアイデアがあると思うが、そうしたことについてもきちんと考えておくべきだと考える。

○通学費の家計への影響は大きなものがある。先ほど、私学の授業料の平均が65万円というお話もあったが、同額程度の交通費をかけて通学している子どもたちもいる。地域的には、丹後海陸交通の200円バスや、京都丹後鉄道では65歳以上の高齢者は200円といった制度が公共交通機関において実施されている。できるだけ公共交通機関を高齢者や子どもたちが使いやすいようにという発想で取り組んでいただいているが、こうした取組がもう少し広がってほしい。中学生が自らの希望に基づいて高校を選択し、その高校に通学できるようにするためには、やはり交通網や交通費がキーだと思うので、ぜひこのことも含めて考えていかなければならないと思う。

○「府立高校の特色化推進プラン」の会議での議論で出ていた意見で、本日の議論に出てこなかった点を一つだけお話すると、特別な支援を必要とする子どもたちや学力的にしんどい子どもたちを前提にして議論しがちだが、むしろその逆の議論も一方では必要で、例えば、京都府の小・中学校における学力は上がってきており、特に中学校はとても頑張っている。その中学生が高校に進学したときにフェードアウトしてしまわないように、学びを相当強く喚起するような高校も置いておく必要がある、あるいは意図的につくる必要がある。つまり、いわゆる進学校といわれる高校の持つ役割ということも、今回の議論では視野に入れておかなければならないと思う。

◆求められる学力の多様性ということについても考えておく必要があるというご指摘をいただいた。その他はいかがか。

前回の議論を踏まえ、今回は、北部地域の府立高校の在り方について意見を交わしてきた。生徒数が少なくなる中、例えば学校再編が不可避だとすると、その再編や学校の配置を考える場合には、地域に貢献できる人材の育成や地域性、求められている学力の多様性にきちんと応える必要があること。一方で、生徒一人一人の立場というか、持っているものの多様性についてもきちんとカバーできることが、府立高校として果たさなければならない役割であるということ。地域の多様性も様々であるし、学力の求められているものも様々である。多様性ばかりで整理してはいけませんが、一人一人の生徒の多様性に対応することは大切である。もちろん100%カバーできるということはないにしても、できるだけ理想に近い形で再編や配置なりを考えていく必要があるということは、共通認識できたのではないと思う。現実には様々な条件があって、そう簡単に理想ばかり追求するわけにはいかないと思うので、現実的なものにしていかないといけない。様々な視点について意見をいただく中、ただ小さくすれば良いとか、少なくすれば良いという議論は一度も出ていないが、できれば次回はこれまで出していただいた意見を踏まえて、ストレートに府立高校の様々な理想を描きながら、現実的にはどのような在り方、どのような活性化が可能なのかということについて、もう少し突っ込んだ議論をして教育委員会にお返ししたいと思うがどうか。確かに様々な教育効果を考える上で、規模の問題については現実的に考えておかないと、理想ばかりで効果がない規模の高校をつ

くっても仕方がない。質の問題にも言えることである。

少々ストレートに意見を交わしても大丈夫だと思うので、もう少し、実際にどうしていくべきかということに主眼に置いて議論するということでしょうか。

○具体的な学校名を出して議論するということか。それとも、地域を絞ってその地域について議論するということか。

◆そのことはまた別の形で議論されるべきだろうと考える。具体的に現実味をもったご意見をとったが、あくまでも原則論に留めておきたい。資料はいただいているが、我々が細かくそれぞれの地域のことや学校の実態を把握しているわけではないので、各高校の具体の方向性については、各高校に通じておられる方の議論に委ねるべきだと思う。基本の方針について、もう少し現実味ある議論をお願いしたいという提案である。

○5年後、10年後には生徒数がこれぐらい減るので、単純に数を合わせるとすれば、5校か6校は高校が減ることになるが、そのことも踏まえてということでしょうか。

◆議論の際には生徒数についても踏まえておいていただく必要はある。

■次回開催予定

第3回：9月25日（金）午前10時から正午まで